

第47号 50円

昭和52年 3月25日

内容

都市と農村との関係…………… 1
 開館十周年記念募金進む…………… 2
 出火のご報告とお見舞のお礼…………… 2
 宿泊料・食事代等の料金値上げ…………… 3
 『世界の建築』にセミナー・ハウス…………… 3
 故郷米庸三先生を偲んで…………… 6
 第88・89回大学共同セミナー…………… 7-9
 千人会報告…………… 4 寄付金報告…………… 5
 館長日記から…………… 11
 業務通信…………… 10 利用状況…………… 11-12

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

◀所在地▶
 東京都八王子市下柚木
 (●192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590番

◀東京事務所▶
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 電話 東京 (241) 3961

編集・発行人 飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

彼は考える。地力維持のためには、食糧や飼料の生産によって吸収された土壌栄養分を人間や家畜を通しての施肥によって補給するという平衡性のメカニズムが必要である。まさにヨーロッパの農法は11~12世紀から三圃耕作が始まり、その後輪転式農法へと地力が絶えず維持されるようなシステム

国民の富とは何か、これはアダム・スミス「国富論」の大きなテーマであった。彼によると国民の富とは、年々の国民の労働によって生産される生活の必需品、便益品および奢侈品であり、なかでも食・衣・住より構成される生活資料としての必需品にポイントが置かれる。さらに食の主要なものは植物性食品であり、この植物性食品、すなわち穀物は彼が国民の富を考

えるときの最初のイメージとなっているといっている。スミスは、富としての穀物は人間がどうしても摂取しなければならぬ食品であり、しかもそれは必ず余剰をもたらす唯一の土地生産物であると把握する。この場合、スミスは社会と自然についての二つのイメージを念頭においている。一つは、生活資料とともにその余剰物を生産する農村と、その余剰の購買に支出される等価物を蓄積している都会との相補的な市場サイクルである。もう一つは、人間と土地と穀物、さらに土地の地力にとつての家畜の役割がひとつとなった世界である。

ムを長い生活の知恵からつくりあげてきている。スミスはこのような人間と土地と家畜と植物というエコロジカルな世界を念頭において、次のような有名な命題をうちたてる。「生活の充足ということ

は、事物の性質からいって便益と奢侈とに先立たざるをえないものである。したがって生活資料を供給するところの農村は、便益と奢侈の手段のみを供給する都会の発達に先行せざるをえない」と。

スミスは、人間の生活には本来、審級性というものがあるとい

うことを示唆している。だが今日の経済の世界では、第一次産品であるろうと第二次産品であるろうと一定の価格と収益とがもたらば規準となつてものが処理される価値の世界である。都市と農村は、所得という面では均等性や平等性に近づいているとしても、その背後の構造としての農村の機能は大きく崩壊している。富は価値に解消されてはならない。国民の富を単に労働の生産物といってしまうと、

スミスは、人間の生活には本来、審級性というものがあるとい

スミスは、人間の生活には本来、審級性というものがあるとい



東京大学教授 玉野井芳郎

都市と農村との関係をどう考えるか

の労働といつても工業の労働なのか農業の労働なのか、さらに労働一般として一般化できるものなのか、という問題も起ってくる。リカードはスミスが価値と富を混同していると批判し、マルクスもまたリカードへの理論の発展を高く評価するが、経済学が発展するにつれて富のもつ重要な内容が失われ、価値または価格という市場の世界へと収斂されてきたのは現実である。

スミスが亡くなったあと、産業革命が進行するにつれて、いままでの農村と都会のサイクルの外部から原料が入ってくるようになり、イギリスは勢い原料輸入国に転換してしまふ。農村の余剰があつてはじめて都会の等価物が意味をもつてくるという中世における両者の共存関係が、農村の都市に対する労働力の一方的供給関係へと変貌する。マルクスが本源的蓄積について周到に分析しているように、都会と農村との関係が近代

スミスが亡くなったあと、産業革命が進行するにつれて、いままでの農村と都会のサイクルの外部から原料が入ってくるようになり、イギリスは勢い原料輸入国に転換してしまふ。農村の余剰があつてはじめて都会の等価物が意味をもつてくるという中世における両者の共存関係が、農村の都市に対する労働力の一方的供給関係へと変貌する。マルクスが本源的蓄積について周到に分析しているように、都会と農村との関係が近代

スミスが亡くなったあと、産業革命が進行するにつれて、いままでの農村と都会のサイクルの外部から原料が入ってくるようになり、イギリスは勢い原料輸入国に転換してしまふ。農村の余剰があつてはじめて都会の等価物が意味をもつてくるという中世における両者の共存関係が、農村の都市に対する労働力の一方的供給関係へと変貌する。マルクスが本源的蓄積について周到に分析しているように、都会と農村との関係が近代

工業化を中心にして、農村や地方がそれに従属するという一方交通的な対立関係は、ここに深刻な様相を呈してわれわれの前に立ちかたててきているのである。

畢竟、今後は生態系の核としての生命系を基礎にした技術や産業ということをどうしても考えな

構成する基本的要素としての土地と労働力が分離するということ

は、共同体が崩壊することを意味する。事実、土地が囲い込まれて農民の手から離れることによつて、小農民の生活の自然的基礎をなしているモン・ランドは瓦解していくことになる。

産業革命によって、食・衣・住のうちの衣料が工業労働者の生活資料の中で極めて大きな意味を持ち始め、綿工業を基礎にした近代の資本主義が確立する。19世紀末からは石炭、鉄工業を中心にした重工業の段階、そして第一次大戦以後の重化学工業の段階へと進んでゆき、第二次大戦以後は社会主義圏の諸国も同じく重化学工業段階へと入ろうとしている。そして一九六〇年代後半以降、今日に至つて、工業化と生態系との衝突という問題が地球規模で顕在化するこ

産業革命によって、食・衣・住のうちの衣料が工業労働者の生活資料の中で極めて大きな意味を持ち始め、綿工業を基礎にした近代の資本主義が確立する。19世紀末からは石炭、鉄工業を中心にした重工業の段階、そして第一次大戦以後の重化学工業の段階へと進んでゆき、第二次大戦以後は社会主義圏の諸国も同じく重化学工業段階へと入ろうとしている。そして一九六〇年代後半以降、今日に至つて、工業化と生態系との衝突という問題が地球規模で顕在化するこ

開館十周年記念募金進む

● 経済団体の寄付次々に内定 ● 試験研究法人扱い閣議決定

昭和51年度後半から本格的募金運動を開始し、年内にはほぼ目ぼしい団体、会社をひとわたりしたので、目下その反響を探り、館長を中心にして募金事務所は、次の対策に迫られている。

募金行脚のあけくれにも、時には朗報がつたわり、疲れを忘れさせてくれる。まず大手の鉄鋼が決まり、52年に入り2月も末になって、銀行が決まり、電力も決ま

り、協力の輪が日毎に拡大される。この合同に文部省体育課からは日本船舶振興会も補助金を下さるといふ内報をうける。

時には先輩学者や大学教授に対して協力を仰ぐことがある。諸先生がご多忙の中を時間をつくって同行して下さることに對し、飯田館長の感激は一入である。

一方において寄付金に対する免税の取扱ひ方法も好転し、期限つ

▲ 出火のご報告とお見舞のお礼

館長 飯田宗一郎

去る2月14日(月)夜、当ハウス第2群第2セミナー室で失火がありましたので、ご心配をおかけいたしました。ここに失火の概況をご報告し、併せてご懇切なお見舞に對しお礼申し上げます。

【当日の状況】 14日の夜は、小雨模様で無風状態、五大学から一五名の利用者が宿泊。火事を出した第2セミナー室のグループ二名は極めて真面目に、午後7時30分より10時30分までゼミを実施。終了後自発的に室内を清掃。タバコのすい殻を灰皿から紙屑箱に入れて退出。午

後10時40分頃出火。隣のユニットハウスで勉強中の学生および附近を通りかかった宿直補助員のアルバイト学生とが、殆んど同時に発見。直ちに本館の宿直職員に通報。宿直補助員は直ちに消防署に通報する一方、五名の宿直補助員他多数の利用学生の協力を得て、消火器一二本および消火栓ホースにより初期消火につとめ、火がおさまりかけた頃、消防車が到着。幸いに第2セミナー室(五四・四〇平方米)の一棟だけ、しかも内部だけの炎焼で鎮火。

▲ 以上のごとき状況で、無風の小

きの指定寄付金としての免税扱いだけでなく、所得税法施行令の改正が52年1月13日の閣議決定となり、当大学セミナー・ハウスは、「複数の大学のセミナーに係る業務を主たる目的とする特定の公益法人」ということが認められ、いわゆる「試験研究法人」の扱いをうけられることが確実となった。会社も個人も、今後はいつでも寄付していただければ、免税の扱いをうけることができる。日本もようやく欧米なみに善意の寄付金に對して税が特別の待遇をされるようになってきたことはうれしい傾向である。

雨模様であったことや、宿直職員、宿泊者等の迅速な初期消火の協力により、他への延焼をまぬがれることができました。早速、U研究室の設計者および建築の清水建設を招き、善後策を講じております。同セミナー室の内側は使用に堪えませんが、骨組および外側はそのまま使用できる見込みです。日常、セミナー室は不足していることでもあり、早急に改修工事にかかり、約二週間か二〇日位で完成し、利用者にご不便をかけたこと、鋭意努力しておりますので、ご休心の程を願ひ上げます。

なお、今回の経験を生かし、管理体制の強化を図り、火災防止の対策を講じたいと存じます。

それにしても当ハウス十一年の歴史と業績が税制を改正させた一因であることは確かである。

昭和51年度 第二回 共同セミナー委員会

*** 昭和51年12月13日 18時~20時半 *** 於・私学会館

本年度第二回委員会は、別記の正副委員長を含む委員四名の出席を得て開催され、次の議題に對して協議が行われた。

- (1) 第85・86・87・88回共同セミナーの実施報告

- (2) 昭和52年1月以降の共同セミナー実施計画について

- (イ) 第89回「人間はどこまで機械か」について

- (ロ) 卒業記念・リユニオン・セミナーについて

- (3) 昭和52年度共同セミナーの年間計画について

- (3)の次年度計画で、まず初めに、すでに提案されているテーマと主旨について提案者より説明が行われ、つづいて共同セミナーの基本方針と懸案となっていたテーマを含む企画室案の説明が事務局より行われた。そのあと会食をしながらも活発な意見の交換がなされた。

- 食後、再び議事を行い、話題に

(1頁よりつづく) なくてはならないだろう。社会的システムの基礎には、必ず生命系がなければならぬ。人間生活の根本に立ち返って植物性食品のもつ意味をもう一度考え直すことは必須である。ここに農業や林業や漁業をワンセットとする言葉の本来的意味での「第一次産業」のもつ重要な意味も浮かび上がってくることになるわけである。

(第88回大学共同セミナーの全体講義より。文責・編集者)

- ① 「環境問題」(5月13~15日)
- ② 「ロビンソン・クルーソーと現代」(5月27~29日)
- ③ 「大学論—新入生歓迎セミナー—」(6月24~26日)
- ④ 「科学と宗教」(11月11~13日)
- ⑤ 「契約社会と法—大学院セミナー—」(12月9~11日)

上ったテーマを整理して、次のように、第一四半期(三回分)、第三四半期(二回分)の大意が決定した。

テーマを決定するまでの議論は、まさに学際シンポジウムの観があり、語ることのたのしさが会議の中にあふれていた。

【出席委員】(敬称略)

- 岡宏子、宇野重昭、関口晃、村上陽一郎、江沢洋、青木生子、荒川幾男、勝見允行、坂口順治、瀬在良男、谷口汎邦、時永淑、野田春彦、山岸健

昭和52年4月から

宿泊料・食事代等の料金値上げ

◆協力会員校以外の利用者は大幅に

開館以来、常に学生の負担を軽くする方針を貫いてきたが、年々高騰を続ける諸物価と人件費のため、その経営は大変苦しくなっている。このような状況の中で、不本意ながら、昭和52年4月1日より別表のごとく若干の値上げをしなければならなくなった。会員校学生の一泊三食付二、五〇〇円を基準料金とし、その他の利用者は種別によって順次値上げ率を高くしたのは、当ハウスがいつも学生本位の経営方針をとっているものと理解してほしい。

◆新たに施設改修協力金を設ける

開館して十二年目、施設改修の時期を迎えた。とりわけ学生が最も多く利用する宿舎ユニット・

宿泊・食料料金改定表

(昭和52年4月1日実施) 単位は円、()内は改定前料金

▶食料料金(定食)

Table with 4 columns: 朝食, 昼食, 夕食, 計. Values: 400(300), 500(450), 600(550), 1,500(1,300)

▶宿泊室料金(1泊につき)

Table with 2 columns: 学生, 教師. Rows: 会員校, 非会員校. Values: 1,000(950), 1,400(1,250), 1,300(1,150), 1,700(1,500)

《長期研修館》

Table with 3 columns: 区分, 5泊以上, 5泊未満. Rows: 会員校, 非会員校, 学企, 学業, 学業, 学業

《教師館》(松下館)

Table with 3 columns: 区分, 大学研究者, 企業関係者. Rows: 1~7号室, 8号室

《本館ゲスト・ルーム》

Table with 3 columns: 区分, 大学研究者, 企業関係者. Rows: A室, B室, C室, D室

何はともあれ、建物は清潔に、簡素に、美しく維持保存されなければ、利用者に対して気持のよい

同大学は昭和51年4月に、当ハウスの一つ向うの丘に新築移転されてから、教授の会合やセミナーによく利用されていた。今回、気運が熟して大学共同体の仲間に入っていたのだとわける。最も近い地域の隣人を加えることができたことは大変うれし

◆東京薬科大学を

協力会員校に迎える

昭和51年12月1日をもって新たに東京薬科大学を協力会員校に迎えた。これで会員校は合計五一大学となった。

勉強の場所を提供することができないので、これから二、三年の間に改修工事を完了したい。

◆『世界の建築』に

大学セミナー・ハウス

選ばれる

世界文化社より昭和51年12月に刊行された『世界の建築』(『世界の美術』第13巻)の中に当ハウスが、世界の代表的な宮殿・寺院・神殿と並んで取り上げられている。

この中には一三五の建造物が所収されており、日本からは薬師寺の三重塔、仁徳陵など一点が選ばれている。本巻の執筆者は吉阪隆正氏で、建築の性格、機能を「外に訴える」「内にこもる」「内外をつなぐ」の三つに分類して編集されており、当ハウスは第三番目の「内外をつなぐ」の中で「情報の交流」の役割を果たすものとして、ケーブ・ケネディとともに選ばれたわけである。

各建築の解説には吉阪教授一流の哲学があり、古代から現代に至る人類と民族の思想的足跡をたどるような興味をもって美しい写真をとらえたのしむことができる好著である。

—*—

「科学の進展とともに学問は分化して行った。しかし人々の生活はあくまでも総合である。情報は伝達の速度を増したが、どんな種類のものをどこにということとは決まかていない。結局は人と人との触れ合い、出会いがこれを定める

のかも知れない。そして歴史は転回していくのである。この会セミナー・ハウスはもう一つの情報伝達の原点である。」

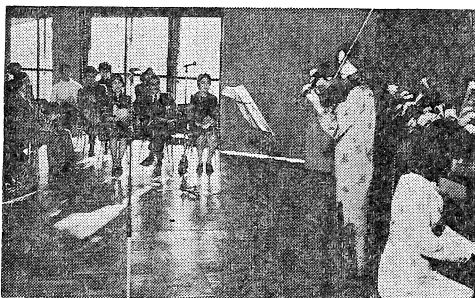
(『世界の建築』一〇四頁より)

『世界の建築』を拝見して

東京大学教授 坂本 義和

建築の写真集は大変立派なもので、たのしく拝見しました。人間が時と所により、さまざまなデザインを工夫して生きてきた文化というものをあらためて感じました。その中にセミナー・ハウスも登場してきたので、あらためてセミナー・ハウスを「見なおした」次第です。

(館長宛の手紙から一部分だけ借用しました) モーツァルトのヴァイオリンソナタの流れる会場(演奏は西村陽子さん)



(故堀米庸三先生追悼記念会—①)

千人会 会員増加運動

第七報 昭和51年12月〜52年1月

♥入会のごころ

前略 大学を卒業し、社会人としての初めての誕生日も近づきましたので、千人会入会申込みいたします。数回の共同セミナー参加を通じ、セミナー・ハウスの素晴らしさを知ることができたのは、偶然の出会いです。この出会いを大切に永く私なりにセミナー・ハウスを見つめて行こうと思えます。何年後にはOB同士の出会いを期待して。 草々

昭和51年12月2日 草々

主婦の友社 青柳総太郎

学生時代に二回、セミナーに参加いたしました。いま思い出して、非常に有意義でした。

豊中市立第三中学校講師 村島 家子

第89回共同セミナーに参加させて頂き、セミナー・ハウスの実態をはっきりと知ることができました。その活動に心から賛同して僅かばかりのお手伝いをいたしたく存じます。

聖心女子大学教授 野澤 晨

◇現在会員は一、三六九名です

大学人 〇八〇名
社会人 二八九名

◇新しく会員となられた方々

(52年1月31日現在)

26名(第36回報告(申込順))

- C 無職 久保田静枝殿
- C 東京大学博士課程 申熙錫殿
- C 主婦の友社 青柳総太郎殿
- C 東京外国語大学助教 松田徳一郎殿
- C 東海大学助教 池田公麿殿
- C 三菱総合研究所 永田 清殿
- C 当ハウス職員 伊藤清子殿
- C 当ハウス職員 加藤閑子殿
- C 工学院大学助手 池田和夫殿
- C 市川きよの学院総務部長 市川勝洋殿
- C 法政大学助教 若山邦紘殿
- C 東京大学教授 藤巻正生殿
- C 東京経済大学助教 徳座晃子殿
- C 豊中市立第三中学校講師 村島家子殿
- C 地域振興整備公団専事 新田 悟殿
- C 都立上野高校教諭 青木俊一殿
- C 東京農工大学助教 本谷 勲殿
- C 東京大学教授 坂野正高殿
- C 東京理科大学教授 窪田庄十郎殿
- C 中央大学教授 林 泰造殿
- C 聖心女子大学教授 野澤 晨殿
- C 京都大学外国人留学生

◇会費ありがとうございます

昭和51年12月〜52年1月(敬称略)

志賀 英殿

アドバイザー 浦上要三殿

A 東洋大学教授 大川信明殿

C 電気通信大教授 遠藤一郎殿

B 東京大学助教 梶谷 尚殿

C 日本女子大学助教 志賀 英殿

茂木誠陸、示村悦二郎、石川明、関龍夫、笠井貴正、新井益太郎、谷重雄、池川郁子、大神田正儀、清水護、小穴純、大谷禎之介、奥繁光、尾田幸雄、杉山吉茂、高橋正男、高橋浩爾、大地羊三、藤林宏一、岡本敏雄、福島正久、伊藤文人、内藤正、古屋正伍、横沼健雄、平松幸一、佐島秀夫、山田暁、岡崎正、清水誠、浜川祥枝、和田木松太郎、竹村研一、三辺正雄、来住正三、有山正孝、池田貞雄、宮川松男、半谷高久、池田温、吉永フミ、茅伊登子、西巻正郎、築地整、斎藤忠利、三浦安子、玉田啓八、川鍋正敏、西田亀久夫、三井為友、弓削三男、小西正捷、中野卓、手塚富雄、隈田直光、山田潤二、杉山好、関口実、山下幸夫、堀内睦子、大川英吾、下川浩一、岩本ミチ、宇都栄子、岩尾裕純、太田敬三、山鹿誠次、高山利勝、湯浅光朝、中鉢正美、青柳総太郎、福原満洲雄、三浦永光、田野成光、佐々木彰、上田明子、蒲

生毅輝、松村憲一、江藤淳、齊藤恵彦、武藤英輔、安味貞正、塚本利明、川端香男利、沢孝一郎、瀬川渡、山田圭一、小竹豊治、清水啓三郎、中尾信之、平木典子、斎藤文雄、深沢実、木村康雄、伊藤学、升本喜兵衛、竹中肇、瀬野信子、山本満、赤松秀雄、大塩俊介、武村次郎、松澤正夫、石井明、高木亀一、桑原哲郎、大羽滋、白井泰四郎、武田昌輔、三宅義夫、後藤聰一、上山碩、斎藤耕二、鈴木皇、矢野正、川本茂雄、喜多村和之、小林甫、池田公麿、久保内端郎、高橋恒郎、宮野彬、三戸公、木村敏美、大橋万知江、友部直、福本日陽、東川清一、伊藤洋、根岸愛子、長島正、若林貞雄、高橋源次、佐久間純郎、石塚司農夫、武藤義夫、園田義道、谷川修、新村新一、大川章哉、新井明、渡辺忠胤、佐藤進、内山正熊、乾崇夫、中富光国、鐘ヶ江信光、天野郁夫、木村増三、飯尾右一、小俣喜久治、河田敬義、川喜田愛郎、永島孝、増池昭男、永積昭、富沢賢治、清水畏三、本谷勲、川瀬謙一郎、松原元一、有賀喜左エ門、金子克美、野中虎雄、原正彦、春日井薫、松元三郎、良知力、脇田良一、北村嘉行、中山知雄、高橋昭三、別枝達夫、石田龍次郎、上谷琢之、東季彦、澤本孝久、玉野井芳郎、大原恭子、加倉井茂樹、打田駿一、鈴木博、大即英夫、小川洋輔、小谷正雄、山田昭房、岩佐凱実、公文俊平、飯泉信、石井素介、小川

◆千人会会員からのたより

今春、久々でセミナー・ハウスを利用させて頂き、植樹の立派に生い育ったのに驚き、そして自然の営みと高い理想を追う館長の営みの偉大さを見ることが出来ました。御発展を祈りつつ千人会の協力、わずかですが感謝をこめて送らせて頂きます。

東京家政学院大学教授 吉永フミ

先日北海道に出張の節、千人会の名に因み、苫小牧の八王子千人同心の墓に詣りました。

日本大学教授 谷 重雄

昨年おそく家人(子供、孫)を伴い、ハウスをお訪ねし、晩秋の丘の様を楽しませて頂きました。毎年誕生日頃にはハウスまで歩いて行き、会費を差し上げるのを楽しみにしておりますが、冬が寒いので振替により払い込ませていただき、3〜4月の候伺いたいと思っております。

弁護士 原 増司

◆寄付金報告……52年1月末現在

▲植樹基金▼

三〇〇〇円(堀米先生追悼セミナー)

記念樹(第88回大学共同セミナー)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

七〇〇〇円(同)

わらのおはち入れ、ポット、茶筒、ふきん 大学セミナー・ハウス食堂 酢屋善元殿 増子商店殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

三〇〇〇円 聖心女子大学教授 岡 宏子殿

◆ティーチ・イン：東大百年の意味を問う◆

「これからの日本の教育と研究のために」 東大の体質はどう変わるべきかー 期日——昭和52年4月22日(金) 午後6時 場所——八王子市下柚木 大学セミナー・ハウス 主催——財団法人大学セミナー・ハウス

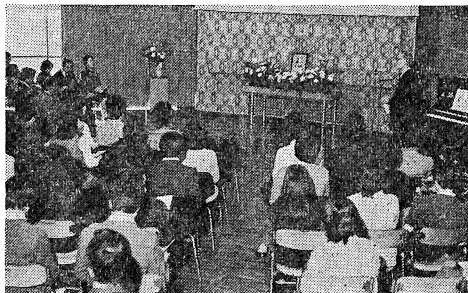
中央大学創立九十周年 論「逐条憲法特講」上下 記念事業委員会事務局殿 大谷光男殿 伊藤 満殿 大谷光男殿 小沼直樹殿 「思想」六二七号 栗原朋信殿 「ヘーゲル精神現象学研究」 板原敏房殿 「子どもの見ること・考えること」 柏木恵子殿 「現代大学双書」全13巻 学陽書房殿

「文部広報縮刷版」1~5、「教育・学術・文化における国際交流」「教育改革のための基本的施策」「昭和51年度国と地方の文教予算」「同教育指標の国際比較」「昭和50年度我が国の教育水準」「歴史と文明の探求」上下 文部省殿 「日本国憲法30年」「日本公法体系」 量子と場—物理学ノート— 江沢 洋殿

「財務諸表論問題演習」「財務諸表通論」「商業簿記」「財務諸表論の徹底研究」 染谷恭次郎殿 「社会学論叢」67 笠原正成殿 「生命の起源」「生命現象の化学」「蛋白質と核酸の分子生物学」 野田春彦殿 「分析心理学」 小川捷之殿 「政治経済史学」二二—二六号 政治経済史学会殿 「都市構造論」 山岸 健殿

「早稲田フォーラム」14~15 「採集と飼育」9~12月、52年1月号 日本科学協会殿 「新アメリカ史叢書」第一、三、四、五巻、「日本とアメリカ比較文化論」全三巻、「アメリカ学入門」二冊、「世界におけるアメリカ像」「アメリカ研究入門」「アメリカ政治外交史」「アメリカ政治外交史教材」「日米関係の研究」上下巻各二冊、「Works of Inazo Nitobe」全五巻 アメリカ研究振興会殿

「アメリカの南部」「総合研究アメリカ」第一、二、五、六、七巻 斎藤 真殿 「Economists at Bay」内外図書殿 「記念論文集・法学部」「同文学部」「同経済学部」「同商学部」



【故堀米庸三先生追悼記念会—◎】

「新入生歓迎セミナー」 5月27~29日 大塚久雄氏

「全体講義」……朱牟田夏雄氏

◎第90回 日本列島—その自然と人間— 5月13~15日
全体講義
水に流す風土—国土科学の一断面— 島津 康男氏
セクション演習
衛星写真からみた日本列島 中村 和郎氏
日本列島における自然生態系 宝月 欣二氏
人口と日本列島 黒田 俊夫氏
日本の都市化 高橋潤二郎氏
日本における国政と地方自治—市民自治の観点— 西尾 勝氏

◎第91回 ロビンソン・クルソーと現代 5月27~29日
全体講義……大塚久雄氏

故堀米庸三先生を偲んで

一周年追悼記念会を開催

昭和51年12月4日

「西欧精神の源流」をテーマとする

共同セミナーを霊前に捧ぐ

当ハウスと堀米庸三氏とのご縁は、開館以前にさかのぼる。昭和38年と39年に三回にわたって開催した大学教員による「大学教員セミナー」に人文系の学者を代表して発題者となられ、当ハウスの目的と方向をさし示す役割を果されて以来のことである。

このような恩人をおぼれ、失って早くも一年、先生が生前に寄せられた、ご奉仕への感謝と高い学識とお人柄への恩慕を表現す

から姿を消された堀米庸三先生を追悼することを計画しました。先生を追憶し、学者として教育者として、偉大な遺産をこのセミナー・ハウスにも残された尊いご奉仕に感謝の思いの深いことを表現するために、「西欧精神の源流」をテーマとする第88回大学共同セミナーを開きました。いくたびか先生をこの丘に迎えることができ、セミナー・ハウスは大変恵まれました。人なくして教育の場は開かれず、今やセミナー・ハウスは、十一年の「時間」による歴史をつくり、国公立数十校に「空間」をひろげ、そして、この開かれた教育のプログラムに、堀米先生をはじめ多くの「人」を迎えることができました。この第88回共同セミナーは、先生の霊前に捧げるものです。先生の御働きに対する感謝の思いを深くし、愛惜の念にかられながら、お写真を前にして、ご銘々に先生を偲びたいと思

かつて昭和42年5月、第9回共同セミナー「大学と人間」において、「学問をする姿勢・大学生活の意味」と題する全体講義をされたのを始め、昭和43年10月には、第19回共同セミナーとして、「ヨーロッパとは何か」のテーマのもとに、自ら企画指導に当たられ、「ヨーロッパ論の一視角」と題して全体講義を受けもたれた。このセミナーは異常な反響を呼び、翌44年5月に再び同じテーマで第23回共同セミナーを開催したという記録が残されている。

玉野井芳郎東大教授は、追悼メッセージの中で、次のようにいわれています。「先生のお写真の前で、先生のお声をテーマで聞いていると、『西欧精神の源流』という先生の学問的業績をシンボライズするようなテーマのセミナーを、一緒にやっているような気がしま

す。あつという間の一年でした。亡くなる数ヶ月前、文字どおり心血をそそいで世に問われた『西欧精神の探究―革新の十二世紀―』という本をまともておられた頃のことや昨日のことのように思い出されます。先生は中世史、とりわけ革新の十二世紀に非常に重要な意味を見出され、人間として深いアイデンティフィケーションをその仕事に託されておりました。この著書によって、従来専門の歴史学者にしか理解されていなかった先生の含蓄ある捉え方が、私たち素人にもよくわかるようになったわけです。

を録音テープからきいたが、大学紛争のはげしかった頃の学生たちを励まされた肉声として今日も語りかけてくれた。

「風がこの丘の上をわたり、樹々がざわめきわたるのをみて、私は聖書のヨハネ伝にある『風は意のままに吹く。人そのいづこより来り、いづこに去るかを知らず。すべて霊あるものかくの如し』という言葉を思い出しました。(中略) 政治づいた現在の社会を回避することによって、この社会を生きていくことはできませんし、よりよい社会にしていけません。意のままで吹く』の『風』は、ラテン語で書かれたヴルガータによれば、spiritusであります。風、スピリットは一つのものであります。あなた方は、一つの本当の命をもつもの、つまり、「自由」をもつものであってほしいということとを、私はこの機会にお願いしたい。おそらく、このことのために、大学セミナー・ハウスは、大へん役立つところであり、紛争をさけて勉強に励むというだけでは、ない本当の意味の利用の仕方が、これから出てくることを期待したいと思ひます」と。

国立音楽大3年の西村陽子さんと阪本祐子さんが、この日もヴァイオリン、ピアノの演奏をされ、追憶の時に香りを加えて下さったことを付言しておきたい。



挨拶に立たれる堀米美代夫人

前記のセミナー開催中に、堀米美代未亡人も出席され、約一五〇名の参加を得て、静かに、感動的に追悼記念会が行われた。

飯田館長は次のごとく挨拶された。「晩秋から初冬に移ろうとするここ多摩の丘に、雑木林の落葉が急ぎます。一年前、私どもの中

当セミナー・ハウス開館五周年の式典において堀米先生は次のように祝辞を述べられている。それ

追憶の時に香りを加えて下さったことを付言しておきたい。

第88回大学共同セミナー

主題——西欧精神の源流

期日——昭和51年12月3～5日

Ⅰ 全体講義

Ⅰ 西欧的社會經濟体制の成立—
中世における12世紀の意義—
一橋大学名誉教授 増田四郎氏

Ⅱ 都市と農村との關係をどう考
えるか
東京大学教授 玉野井芳郎氏

Ⅱ セクション演習

A 「働らく者」とは何か—中世
の農民と都市民—
北海道大学教授 井上泰男氏

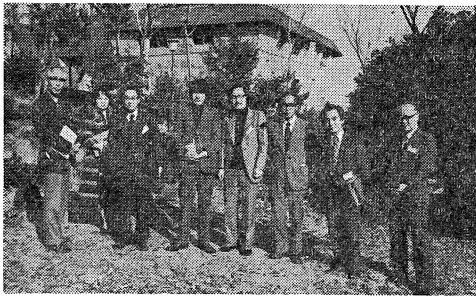
B 中世の異端運動について—カ
タリ派の諸問題—
高知大学教授 渡辺昌美氏

C 騎士—力と愛—
立教大学教授 新倉俊一氏

Ⅲ 後期中世の表情—中世も終り か—

D 学習院大学教授 堀越孝一氏
E ヨーロッパの生活意識と文化
東京大学教授 木村尚三郎氏
(運営委員)

Ⅳ 参加学生 107名(内女子46名)
筑波大(12)、東大(10)、早大
(8)、東外大(7)、立大(6)、
慶大、津田塾大(各5)、ICU、
上智大、中大、東女大、日女大、
立正大(各4)、東京医歯大、国
学院大、東経大、明大(各3)、
一橋大、独協大、玉川大(各2)、
東教大、東工大、千葉大、学習院
大、成蹊大、武工大、明学大、東
海大、フェリス女学院大、跡見学
園女大、女子栄養大、立命館大
(各1)、合計32校



右より木村、井上、渡辺、堀越、新倉、玉野井、同夫人、飯田の諸氏

今回のセミナーは、故堀米庸三先生を追悼して企画されたもので、先生が亡くなられる前の数ヶ月間、文字どおり精神を傾けてまとめ上げられた遺著『西欧精神の探究—革新の十二世紀—』を共通参考文献として、別記のような構成によるセミナーが実現した。
運営委員には、先生の愛弟子であられる木村尚三郎先生が、かつて出られ、企画・運営の中心となっ

て精力的に推進された。そのお蔭で、故人の業績をしのぶセミナーにふさわしい講師陣をお迎えすることができた。全体講義の増田四郎先生は先輩として、セクション演習の諸先生は弟子として、あるいは学恩を継ぐ研究者として、いずれも堀米先生とのゆかりの深い方ばかりである。とくに井上泰男先生は堀米先生が教師となられたばかりの北大時代の弟弟子で、渡辺昌美先生とともに遠隔の地から参加して下さった。
学生の反響は予想どおり大きく、定員を超える一三〇余名の熱心な申込みがあり、西洋史学とその精神史に関するテーマへの強い関心があることがわかった。
プログラムは増田先生の全体講義をもって開始した。増田先生は歴史の転換期とは、人々の世界観—神、自然、自分たちの仲間に対する考え方の—根本的变化を意味し、11～12世紀前後の社会経済史的变化がまさにこのことをもたらした、と前置きされ、ゲルマン村落の集村化にはじまる自治的小都市の成立過程においては、農業、商業、工業の三つの要素が地域ごとにバランスをとりながら下からの自由な仲間形成として発展するが、この集落の形態こそが8～9世紀のカール大帝時代に枠組を得て11～12世紀に自己をヨーロッパと意識させた特殊ヨーロッパ的なものの中核である、と述べられ

た。さらに都市と農村との問題という視角から地域史研究の今日的な重要性を強調され、翌日の玉野井先生への橋渡しをされた(1頁参照)。

両先生の精緻な研究を背景にしたお話は、今日のな問題をも浮き彫りにし、実に「歴史研究の意味は現在を理解する手がかりを与えることにある」という堀米先生の年来の主張を彷彿とさせて、学生に深い感銘を与えたようである。
二日目の午後には、追悼記念会が行われ、参加者一同先生の残された大きな業績をしのび、愛惜の念を新たにされた(詳細は6頁)。
最終日の全体集会では、各セクションの報告のあと、指導教授も加わり活発な議論が展開され、「祈れ、そして働け」という改革精神を胸に刻んで三日間のセミナーの幕を閉じた。

●セクション指導者の一人として

北からの便り

北海道大学教授 井上泰男
今回の大学共同セミナーは、在京の諸先生の他に、南国高知の渡辺先生と北国札幌の私が初参加したことが異色であったらしい。お別れの昼食会でも私たち二人が挨拶し、この感想文を私が書く羽目になったのも、このことと関係している。渡辺先生は上手に本音を外される特技をお持ちである

が、セミナー・ハウスを辞去する最後の時までBセクションの学生諸君との交流が見られたことは、心あたたまる光景であった。
さて、「ラポラトール」をテーマとするわがAセクションにも、各大学、各専攻の問題意識に富んだ学生諸君が集い、深夜まで談論し、おかげで私も滅多に味わうことのできない体験を共有することになった。互いにはじめて知り合った者同士がさして人見知りもせず、自然にセミナーの空気にとけこめるということは、現代の青年たちの性格にもよるだろうが、館長をはじめセミナー・ハウスの職員の方たちの運営の妙味も大いにあずかっているようで、いたく感嘆した次第である。

セミナーの趣旨からも、私としては参考資料などで講義は簡潔にすませ、討論の時間をなるべく多くとるように配慮したつもりだが、それでも時間は不足がちになり、結果的に問題意識が拡散し、焦点が定まらなかつた気もする。その意味では、専門志向型の学生諸君には物足りなかつたかもしれないが、このセミナーに、今後それぞれの問題関心をふかめる上で一つの刺激剤の役割以上のものを期待するのは、そもそも無理ないものである。
けれども、各人各様の多元的な設問、とくに初歩的な質問には、応答に窮することもあったが、それらはそれなりに興味があり、

提起された問題の底を流れる青年たちの思考様式の動向を知るのに非常に参考になった。

その他にも、今回の共同セミナーが残してくれた忘れ難い経験は多い。各セクションを担当された学友の諸先生と起居を共にしたこと、増田、玉野井両先生の中身の濃い風格のある講義を拝聴できたこと、とくに堀米庸三先生の追悼会で、懐しいお声を再現していただいたことなど。テープから流れる堀米先生の諄々とさとするようなおだやかな語り口からは、練達の境地にある端正な名匠の面影は浮んできても、かつて北方に住んだ「鴛の眼」をした男を想像することはもうできなかつた。

多摩丘陵からの冬枯れの眺望もまた格別に越ぎのふかいものであった。北海道の雄大な風景を見ながらいる私にとっても、それが大都会に残されている自然であるだけに、たまたま試食できた野鳥の料理とともに、新鮮な感動をよぶものであったことを、ここに付言しておきたい。

●参加学生の一人として

笹川 真理子

セミナー・ハウスでの三日間では地球の自転が速まったとしか考えられない。セクション演習では先生方の豊富な知識の吸収に専心し、夜は夜で新しく出合いながらもう何年もつき合っている気持のする友と語り、全体講義では先

生方と真理探求の名のもとに、真剣な質疑、愛情深いが学者としての厳しさの感じられる応答が時間を延長して続けられた。

また今回は、堀米先生の追悼セミナーということで、二日目の午後、追悼会が催された。学生からは、先生にショパンとモーツァルトの曲が捧げられた。玉野井先生からは、堀米先生のモダンボーイぶりがしのばれるライスカレールのエピソードや、悲しくも最後のお手紙となつてしまった中から、先生が学者としていかに尽くされ、そして常に新しい問題意識をお持ちになつていたかをうかがつた。その上、先生のお声を録音テープでお聞きすることができ、われわれは、先生追悼のセミナーではなく、先生と共にするセミナーに参加していると感じたのである。

今回のセミナーで私は次の三点を学んだと思う。第一に、「比較の中の思考」の重要さを知り、空間的にも時間的にも視野が広げられた。われわれは、ヨーロッパを知ることにより世界の中の日本人であることを、過去との対話において歴史の中の現代人であることを自覚せねばならない。

第二には、堀米先生の一生を回顧し、現在活躍中の先生方を眼前にして、学者とはどうあるべきか、学者の姿を強烈に焼きつけられ、深く感じいった。

第三に、このようにわれわれに

とってかけがえのない大学共同セミナーであるが、そのわれわれに對して、飯田館長先生が愛情を持って、「もうセミナー・ハウスへ来てはいけない」とあえて言われたお言葉が身にしみた。特に、もう三回も参加させていただき、自分の大学を離れることにより自己の

第89回大学共同セミナー

主題——人間はどこまで機械か

——物質・生命・精神——

期日——昭和52年1月14～16日

△セクション演習とシンポジウム

A 心とからだ

東京大学教授 大森荘蔵氏

B 分子生物学と人間

東京大学教授 野田春彦氏

C 形の識別機能——心理学の立場から——

聖心女子大学教授 野澤 晨氏

D 精神の自然科学的アプローチ——その限界について——

東京大学助教授 今村護郎氏

△シンポジウム

東京大学教授 後藤英一氏

〔指定討論者〕

慶応義塾大学教授 山岸 健氏

学習院大学教授 江沢 洋氏

（芸術社会学）

（心理学）

向上を目ざしていた私には、「セミナー・ハウスでの経験を自己の大学に還元し、まず自己の大学から改革せよ」という館長先生の厳しいお悟しと受けとれた。努力しよう。そしてまたいつかは八王子の丘陵に立っているであろう。 (津田塾大学英文科3年)

就任された岡宏子先生は、当初より継続的な学際セミナーの実施を強調され、いくつかのテーマを提案されていた。その中から先ず「人間はどこまで機械か」を取り上げ、野田春彦先生のご協力を得て計画の実現に努められた。やがて江沢洋、山岸健両先生も運営委員会に加われ、極めて意欲的にこの大テーマに取り組まれた。頭脳集のお蔭で、別記のように各分野からの専門家を動員したセミナーが実現した。

募集期間が12月という年末のあわたたしさにもかかわらず、一〇〇余名の熱心な学生が応募された。さらに大学教授二名、放送関係者一名を含む計五名のオブザーバーの参加申込みがあった。参加学生一〇〇六名のうち、人文・社会系が五九名、理工系が三三名、医科系が一四名で、文字どおり学際セミナーらしい構成となつた。

今回のセミナーの特色はなんといっても二回にわたつて行われたシンポジウムであつたらう。岡先生の巧みな司会の下に、指導教授全員が参加による率直な意見の交換が行われ、諸科学の成果をもとにレベルの異なる考え方の相互の関連を明らかにするといふ、学際セミナーならではの討論が繰り広げられ、参加者一同は共同セミナーの醍醐味を心ゆくまで味わつたようであつた。

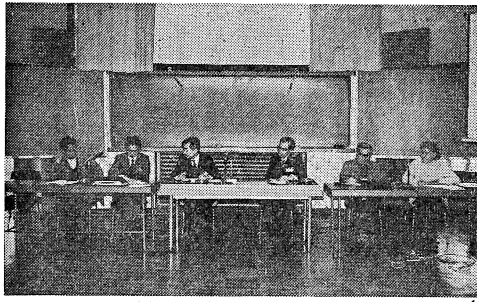
それにつけても、東大教養学部長という要職にあつてご多忙な大

森莊蔵先生をはじめ、各分野で第一線の仕事をしておられる方々が、三日間学生と起居を共にされ、その人格と学問を惜しみなく与えて下さったわけで、このようなどご奉仕があつてこそ、初めて成立するのが、この共同セミナーであることを示した好例である。

●企画者の一人として

聖心女子大学教授 岡 宏子

一つの大学の垣根を超えた大学セミナー・ハウスで共同セミナーをするというのなら、その内容も一つの専門領域の垣根を時にはふみ超えて、意見を交換し論議し、考え直してみろという、いわゆる学際的なセミナーをやるべきではないかと、前々から考えていたのだが、その試みともいへべきもの



シンポジウムの岡、野田、今村、野澤、後藤、大森の諸氏(右より)

が今回の「人間はどこまで機械か」をテーマとする共同セミナーであった。

しかし、「物質・生命・精神」などという、とてつもなく大きな副題を掲げ、哲学、分子生物学、情報科学、そして心理学から物理学、社会学まで加えて、領域の異なる専門家が意見の交換と論議によってこのテーマの核心に迫ろうという試みは、実は一つの冒険でもあり、また問題もはらんでいた。

まず第一に、専門家が垣根を超える時、専門領域の中では非常に細心の注意を払い、実に確実な手法をもって「これだけはいえる」という態度をとっていた人が、実に簡単に飛躍をしてしまったり、また、その反対に垣根をほんの一步か二歩しか出られなくなったりすることもあり、このような踏み出し方の異なる先生方が、共通テーマで互いにかみ合えるか、という問題がある。

次には、このような学際的テーマで集まってくる学生の意図や期待がまちまちで、一方の要求を満たすと他は不満があるということに陥り易いことがある。学生は、ある領域については一応専門的知識をもち、他の領域には全くの素人であるという時、両領域に求める学習期待にはかなりの差がある。これを一緒にして、両者を満足させるような演習をすることは、まことに骨の折れる困難なことなのである。

このような問題を持ちながらも三日のセミナーがどうやら無事に終了したのは、全く、指導に当たられた諸先生方の努力のためものといえよう。二日にわたるシンポジウム、さらにセクション演習をばさんで全体会議へと、三日間を通して共同の場を持つハードスケジュールである。セクション演習を持たない私は、いささか肩身のせまい思いで、先生方のご苦労に頭を下げていた次第である。

それにしてもこの多摩の丘は不思議な力をここに集まる人達に及ぼすようである。日を追って活気がましてくる学生達、寝不足でいささか赤い眼と少しくたびれてしわの寄った顔で、でも意気はおとろえず、何となくそうせずにはいられなくなつて、朝から晩まで、その学生達とつき合う教授達、そこには日頃の大学に見られない雰囲気があるような気がする。

多摩の丘の自然環境のなせるわざか、飯田館長の磁石のような力なのか、参集学生の熱気なのか、そのすべてであるのかも知れない。その雰囲気の中に私もまた引きこまれて、この続きをすとしたら、学際セミナーではどんな点をどんなふうに変更したいか、など、またまた考えている次第なのである。

●参加学生の一人として

(A) 中谷 実

僕は共同セミナーは初めてなので、どういう形で行われていくのか興味しんしんだった。が、テーマそのものへの解答が得られなかったとはいえ、終った今は「とても良かった」という感じがする。僕が参加した大森先生のセクションは、既成の大学の講義形式にありがちな一方通行的なものでなく、同じテーブルの上で専門的な知識とそれと呼応する討論の場があったように思う。ある程度の学術用語を吸収してしまえば、一流の先生と討論ができる理想的な形の演習だった。マスプロ教育に慣れてしまったわれわれ学生にとって貴重な経験ではなかったろうか。議論があまりにも白熱化して、みんなやや感情的になりかけた一場面があった。そして大森先生に質問の矢が、正に矢継ぎ早に飛んでいった。先生は弱ったような顔をされたながらも、一つ一つできるだけそれに答える努力をなさっているようだった。立派だと思った。大森先生自身の学問に対する態度を学ぶような気がした。

自分の頭でものを考えぬき、それを一流の先生にぶっつける。そして、吸収すべきところは吸収する。だから、外国の大学のことはわからないが、日本の大学教育に最も欠けている点を共同セミナーは満たしてくれたのではないだろうか。

うか。(日本大学文学研究科博士3年)

(B) 松林 洋子

初日と二日目の両日にわたって行われたシンポジウムは、諸分野を代表する講師陣の文字どおりのブレインストーミングとなり、ある時は議論が堂々巡りを始め、ある時は思いがけぬ方向へ発展し、予想以上の混乱を呈した。しかしながら一つのテーマをめぐる活発な意見の交換に、参加者全員大いに刺激され、各自が様々な興奮をセクションに持ち帰り、セクション演習では白熱した議論を展開した。ともすれば視野の狭くなりがちな女子大に学ぶ私にとって観点の異なる考え方に接することができたのは大きな収穫だった。

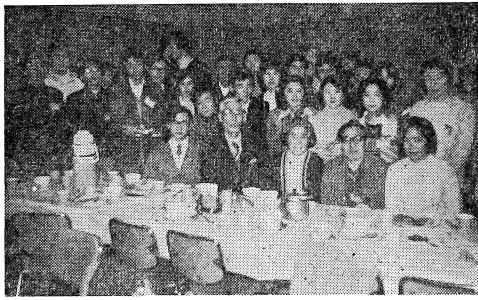
セミナー中は、シンポジウム、演習において緊張の連続であった。そんな中で、和やかな雰囲気につつまれた夕食時の交歓会は、私達の楽しいくつろぎの場であった。特に、飯田館長をはじめとするセミナー・ハウスの職員の方々の温かいご配慮による成人式の晩の祝賀会は今年成人式を迎えた私にとって一生の思い出となるものであった。

共同セミナーから半月が経過した。夜の更けるのも忘れて語り合った仲間が、今日も、セミナーで得たものを生かしながら、日々の研鑽を積んでいるのだらうと考えることは、私にとって大きな励みである。(聖心女子大学教育学科3年)

●業務通信

ゼミで合宿する人々がお互いにあいさつを交わし、他大学の教授や学生と交流するとき、この丘は文字どおり大学共同の広場となり、心のかよったコミュニティとなる。利用者の生活の中に組み入れられた季節ごとの諸行事も、そのような目的で計画されている。そればかりでなく、年毎に忘れ去られようとしている昔ながらの季節感や情緒を呼び起こし、伝統的なものを見直す機会ともなっている。そこで、年末・年始のキャンパスの模様を点描してみたい。

12月18日夜、講堂で行われたク



38名の新成人の前途を祝して

リスマスの集いについては、前号の写真で報告した。そのときの献金(本館玄関に置かれた年末助け合いの「なべ」に入れられた献金を加えて一万円)は、24日のイブに、この丘に近い重症心身障害児の施設、島田療育園の子どもたちへの贈物とした。

12月27日には恒例の餅つき大会が遠来荘の前庭で行われた。おだやかな日和に恵まれ、当日の利用者五グループ一三二名と当ハウス職員が一体となり、年の瀬らしい交歓のひとつをもった。本物の臼と杵、釜やせいろなどの道具はすべて当地域在住の職員の家から運ばれたもので、屋外のかまども手作りなら、たきぎもすべてこの丘のものだ。今年は昼食時に合わせて行われ、在泊者は先ず食堂で年越しうどんで腹ごしらえをしてから、餅つき会場に廻った。この日の好運をつかんだグループは一週間の長期セミナーを指導された杉野女子大の田村先生や慶大工学部佐藤・川口研究室。先生方が杵をとると、周囲の学生から声援がとぶ。腕に自信のある男子学生が飛び入り、杵をもつのは初めてという女子学生も元気に挑戦。サービスタワーのおばさんたちの手で納豆、大根おろし、あん、きな粉がまぶされて製品となる。当ハウス独特のもてなしに学生達は大喜びであった。

12月28日は当ハウスの「仕事納め」。51年最終日の在泊者は七グ

..... CAMPUS NEWS IN BRIEF

When students and professors of various universities gather at the Seminar House for their respective seminars, a kind of community spirit develops as they exchange greetings and conversation among themselves. In order to promote such inter-university and inter-personal contacts, the House arranges a variety of programs from time to time to include everyone present.

Fellowship dinners are frequently held in the dining hall, during which the groups are introduced to each other, a few table speeches are given, and everyone joins in the fun and singing.

Various seasonal events and traditional occasions are celebrated as well. We had three such special programs in the months of December and January. A Christmas party was attended by 160 seminar participants from 8 different universities. Then, on December 27th, both students and professors from 5 groups enjoyed *mochi* (rice cakes) which they had made in the traditional mortars with wooden pestles. This took place in the garden of the *Enraiso*, an old thatched-roof farm house on the campus. January 15 is "Adult's Day", celebrating the coming-of-age in Japan. A special supper party was held for 38 student participants who had chosen to spend this day attending seminars here, rather than the official ceremonies in their home towns. A commemorative gift was presented to each of them by Mr. Iida, the Director of the House.

This fiscal year's series of 7 Inter-University Seminars was concluded with the one held in January on the question: "To What Extent Is Man A Machine?" During the year, a total of 680 students from 70 universities took part in these seminars. The Inter-University Seminars are the major programs organized by the House itself. They have been held 89 times since the opening of the House in 1965, providing much-needed forum for individual and inter-disciplinary encounters.

The Seminar House wishes to expand its role, serving as an instrument for furthering inter-national exchange as well. A special fund-raising campaign is going on to construct an international orientation center as addition to the campus.

The unique architecture of the Seminar House buildings was portrayed in "The Architecture of the World", a book recently published by the Sekai-Bunka-Sha. They accurately described the Seminar House as a center for human exchange and communication.

ループ、一七五名。なかでも杉野女子大、新英語教育研究会、文学教育研究者集団の三グループは暮の利用の常連で、すでにお互い顔なじみ。食堂でのお別れ昼食会では、全員が「ほたるの光」を合唱し、またの日の再会を約している。

1月5日が新年仕事始め。7日の昼食には七草がゆが供された。翌8日の土曜日には新春第一回の交歓会を行った。新年早々から早大、立大、上智大、駒沢大、東経大、東京理科大、東大、二橋大、横浜国大など一〇グループ一三二名を迎えた。その熱心さは職員一同に年頭の大きな励ましとなった。

1月15日「成人の日」には、新たに成人になった学生諸君を探し出して、夕食時に交歓会を催した。これがいうところのセミナー・ハウス方式の成人式である。今年、成人になった若者は三八名(うち女子二名)——共同セミナー参加者三名、学芸大四名、都留文科大一名——であった。共同セミナー委員長の聖心女子大・岡宏子先生が新成人の前途を祝ってメッセージを贈られた。飯田館長からも記念品が各人に手渡され、参加者一同からは暖かい祝福の拍手がおくられた。正面に並んだ新成人たちは、有志の音頭とギターの伴奏で「戦争を知らない子供たち」「友よ」などを元気に歌い、一同もこれに唱和した。この日、全国の新成人一五八万人はさまざまな「成人式」に臨んだはずであるが、その中の三十八人がこのセミナーの丘で異色の儀式に出席したわけである。

× × ×

●館長日記から

2月13日、故大浜信泉先生一周忌供養の集いが早稲田の大隈会館で開催された。月日の流れは早いものである。忘却どころか忘れ得ない思い出ばかりである。私は霊前に頭をたれ、改めてこの大恩人にお礼を申し上げた。◆この13日、私は往復の車を利用し、白井常、川原栄峰、板垣與一の三先生宅を表敬訪問した。板垣先生が忠実なセミナー・ハウスニュースの愛読者であられることを発見し、同行した編集者の能子氏は感激と恐縮。彼女は、その任務を自覚したらしい。先生が巻頭の斎藤真教授の論文に赤い線を入れたり、私の十年先の喜寿のことなどにしてしをつけておられたのに全く驚きでした。◆3月5日、相良惟一学長のご招待をうけ聖心女子大学の卒業式に出席した。また岡宏子教授には共同セミナー委員会の委員長をお願いしていることでもあって、梅の香ただよう美しいキャンパスを訪ねた。式はおごそかで、簡素、礼儀が美しく表われ、それが聖心の学風となっていた。◆2月14日、全くの小火で消しとめたが、周辺は枯草の原野、丘の上は散在する木造の宿舍群。もし強風であつたらひとための大火になつたかも知れないとは消防署をはじめ大方の世評であつた。火災防止につとめよとの警告の機会と心がけたい。◆3月14日、木川田一隆氏

の東京電力社葬に出席した。この偉大な財界の指導者を悼む人々のなんと多く集っていることか。理想を高く掲げ現実の世界に生きた先見性と良心的行動のリーダーであつたというのが木川田人物論のようである。昭和49年8月に産業界のトップを切つて企業の政治献金ストップを決断して、大きな波紋を投げたことがある。このように企業の社会的責任を説きつづけた木川田論の根底をつくつたものは、河合栄治郎東大教授との出会いであつた。「よき師」に恵まれない学生にとつては、なんとヘンな大学に入学したものだということになりはしないか。マスコミは大学の格差や学歴社会を批判し、受験地獄をあおっているが、このようなヘンな風潮になつたことを私はじつと見つめているこの頃である。◆昭和40年2月11日、三億円募金が満願に至らず困りはてた茅誠司先生と私は木川田東電社長を訪問した。五百万円位を予想していたが、一千万円という大金を下さつた。茅先生と私はいまでも感激の後日談としている。故佐藤喜一郎氏のお通夜の席で、「佐藤さんは本当にセミナー・ハウスのことになると熱心でしたね」と木川田さんは私に話しかけて下さつた。お二人ともいまは地上になく、痛惜に堪えないが、人間として大成した大人とはこのような人格をいうのであろう。

- ▼交歓会とスピーカーの先生
- ①12月3日 第88回共同セミナー他四大学一八六名、増田四郎東経大教授(一橋大名管教授)
- ②12月18日(クリスマス) 八大学一六〇名、色川大吉東経大教授
- ③1月8日 九大学一三二名、大沢綱一郎東京理科大学教授、木村尚三郎東大教授
- ④1月15日(成人の日) 第89回共同セミナー他三大学一七九名 岡宏子聖心女子大学教授

× × ×
 ▼例年秋から冬にかけては卒論の中間発表などで当ハウスを利用するグループが多い。セミナー室での討論、指導教授の宿舎で面接による個別指導を受けるゼミ、その形態は違つても、あちこちの群の中に真剣な表情の学生を見かけるのはこの丘の風景である。

▼12月・1月にも大きな学会、研究会の利用があり、いずれも参加者は日本列島各地から集つていた。例年新春に行われる東京神学大主催の教職セミナーには全国の教職者・大学院生七〇名が参加し、極めて高度な学習会がもたらされた。群馬が中心となつて開催した感覚中枢シンポジウムには各地の大学の医学・生理学関係の五〇名が参加している。また、年末に開かれた自動車の排気浄化に関する研究会は東大の生産技術研究所が世話役となつて開催され、自動車排気の社会的影響の大きさと複

雑さを背景に、単に浄化技術の工学的評価だけでなく、経済的、社会的評価の研究も重要であると、約一五〇人の自然科学、社会科学研究者が四班二サブグループに分かれ、二泊三日のすばらしい学会を展開した。

●利用状況

*** 同月2回利用
 ** 同月5回利用
 12月 三、二八八
 1月 二、一八八

12月	
神奈川大学教授	小山吉之助
電気通信大学教授	大須賀政夫
一橋大学教授	塚場 準一
津田塾大学教授	馬場 伸也
慶応義塾大学助教授	山田 辰雄
早稲田大学講師	鈴木 二郎
明治学院大学教授	増田 茂樹
東京都立大学体育会	
法政大学助教授	田中 義久
東京都立大学助教授	下山 瑛二
千葉商科大学教授	清水 昌三
国際基督教大学教育哲学研究会	
成蹊大学教授	*村松 司叙
青山学院大学教授	清水 英夫
武蔵大学講師	大橋 泰二
東京経済大学助教授	荒川 幾男
明治大学文学部セミナー協議会	
立教大学教授	大橋 泰二
横浜国立大学助教授	市川 博
明治大学講師	田口富久治
東京大学教授	磯谷 遙
東京都立大学助教授	峯岸賢太郎
津田塾大学教授	今井 けい
早稲田大学教授	十代田三知男
早稲田大学教授	三浦 修
早稲田大学教授	染谷恭次郎
東京大学教授	金岡 秀友
早稲田大学教授	矢作吉之助
早稲田大学教授	福山 仙樹
早稲田大学教授	薬師寺明久
早稲田大学講師	成田誠之助
駒沢大学教授	森 武麿
東京都立大学助教授	国井 隆弘
東京都立大学助教授	伊藤 文人
一橋大学助教授	石 弘光
明治学院大学助教授	竹内 真一
明治大学助教授	西野 万里
早稲田大学助教授	川原 栄峰
法政大学助教授	若山 邦紘
早稲田大学助教授	西尾 巖
横浜国立大学助教授	久保村隆祐
東京工業大学助手	近江 政雄
立教大学助教授	鈴木 正男
明治大学講師	山野 康美
工学院大学教授	麦島 与
東京経済大学助教授	色川 大吉
東京学芸大学助教授	飯田 秀一
立教大学助教授	高橋 昭三
東京外国語大ベトナム文化研究会	
上智大学教授	尾高 邦雄
東海大学講師	高橋 進
東京外国語大学教授	原 誠
青山学院大学助教授	渡部 一郎
東京都立大学助教授	山住 正己
東京都立大学助教授	金沢 孝文
横浜国立大学助教授	小川 捷之
青山学院大学助教授	森田 信義
中央大学教授	高窪 利一
日本大学助教授	榛沢 芳雄

新書現代社談講

新書東洋史全11巻

全巻編成白抜き数字は既刊

既刊は各390円

- 1 中国社会の成立中国の歴史① 原始・秦・前漢 伊藤道治
- 2 世界帝国の形成中国の歴史② 後漢・隋唐 谷川道雄
- 3 征服王朝の時代中国の歴史③ 宋・元 笠沙雅章
- 4 伝統中国の完成中国の歴史④ 明清 岩見宏 谷口規矩雄

- 日本女子大学助教 小川 信子
- 東京薬科大学生協組織部会談 尾関 守
- 早稲田大学助教 松村 祝男
- 千葉商科大学助教 飛田 満彦
- 東京都立大学助教 伊藤 玄三
- 法政大学助教 榎本 肇
- 東京工業大学助教 大橋 幸
- 東京学芸大学助教 大橋 幸
- 慶応義塾大学助教 佐藤 豪
- 明治大学マーケティング研究会 多摩中央ミサワホーム
- 東京女子大学講師 白井 常
- 高千穂商科大学助教 島谷 良吉
- 日本女子体育短期大学講師 江幡 玲子
- 東京YWCA学院シニア・ジュニアクラス合宿 早稲田大学学生 上智大学学生
- 都留文科大助教 和田 明子
- 国士館大助教 亀山 潔
- 独協大助教 高木健次郎
- 日本獣医畜産大助教 吉田 六順
- 東邦大助教 吉田 光孝
- 立正大助教 厚東 偉介
- 杉野女子大助教 田村 統司
- 第88回大学共同セミナー 東京大学助教 木村尚三郎
- 四大学(慶大、早大、一橋大、中央大)合同セミナー 産業基礎科学部会 ヨーロッパ思想研究会 構造地質研究会 自動車排気浄化に関する研究会 文学教育研究者集団 新英語教育研究会
- 【個人利用】 芝浦工業大助教 十代田知三 早稲田大助教 大河原宏之 上智大助教 谷 雅文
- 1月 神奈川大助教 小山吉之助 武蔵工業大助教 桑原 哲郎 早稲田大助教 村田 勝彦 東京理科大助教 大沢綱一郎 横浜国立大講師 青柳 肇 駒沢大電気美術研究所

- 立教大助教 香原 志勢
- 早稲田大講師 佐々木宏幹
- 東京経済大助教 徳座 晃子
- 上智大助教 磯見 辰典
- 明治大助教 山本 敏
- 東京都立大助教 稲垣 寛
- 電気通信大助教 萩原洋太郎
- 東京大助教 諸井勝之助
- 東京大教養学部ドイツ語補習ゼミ 諸井勝之助
- 東京学芸大教育学部演劇の練習 錦田 忠彦
- 東京都立大助教 大川 信明
- 東洋大助教 武者 利光
- 東京工業大助教 村上 直
- 法政大助教 石田 望
- 東京経済大助教 鮎沢 成男
- 中央大助教 坪井 実
- 東京薬科大助教 河野 恵
- 東京薬科大助教 荒井 献
- 東京都立大助教 高田 清朗
- 東京都立大助教 小和田 恒
- 東京大講師 矢代 和夫
- 東京都立大助教 亀山 三郎
- 中央大助教 吉村 二郎
- 香原 志勢 慶応義塾大助教 山田 辰雄
- 佐々木宏幹 東京大助教 利谷 信義
- 徳座 晃子 高崎経済大助教 三浦 永光
- 磯見 辰典 茨城県立結城第一高等学校 清泉水女子大講師 磯見 辰典
- 山本 敏 彰栄保育専門学校講師 菊池 百合
- 稲垣 寛 日本女子体育大助教 河田 喬夫
- 諸井勝之助 第89回大学共同セミナー 玉川大助教 若槻 泰雄
- 大川 信明 都留文科大助教 和田 明子
- 武者 利光 東京YWCA専門学校 蟻類研究会
- 村上 直 東京神学大就職セミナー 感覚中根シンポジウム 滝野川教会 日本化学 松下電器産業 日本水産* 柳河精機 京王プラザホテル*** A・D・O通信教育スクーリング 民放労連関東地方連合会

東京芝浦電気 【個人利用】 高橋 清 芝浦工業大助教 *吉田 光孝 東邦大助教 岸 英明 青山学院大助教 織田 秀樹 一橋大講師 佐藤 共子 一橋大学生 奥田 敏 室蘭工業大学生 高見沢邦郎 東京都立大助手 志賀 英 日本女子大助教 編集後記 本紙を隔月発行の定期刊物としてから、本号で6号目、ちょうど一年を経過したことになる。日常の業務に追われる毎日ですが、どうか定期的に発行することができました。 思わぬところで、思わぬ方から「ニュース」を毎号、すみからすみまで読んでいますよ」といわれて、いたく感激することがあります。時にはご叱正もいただきました。(能)

新書日本史 全8巻 各390円

- 1 倭国の世界 上田正昭
- 2 律令制の虚実 村井康彦
- 3 中世の開幕 林屋辰三郎
- 4 戦乱と一揆 上島有
- 5 近世の日本 高尾一彦
- 6 改革と維新 原田伴彦
- 7 近代の潮流 飛鳥井雅道
- 8 昭和の五十年 井上清